

孔子の教育思想とその実践

The Educational Thoughts and Realization of Congzi

王 智 新

孔子 (Congzi, B.C. 551-B.C. 479) は中国春秋戦国時代の思想家、教育家であり、儒家の創始者でもある。中国文化の傑出した代表者として、孔子ほど広く知られている者はないと同時に、彼ほど誤解されている者もない。

グローバル化・情報化・IT社会と言われる一方、「テロ」・公害・経済不況・学力低下などという面も大きくクローズアップされ、ますます混沌とした世相が深まっている今日のような時代に、孔子の思想と実践は果たして意味を持ちうるかどうか。もし、持ちうるならば、どんな意味合いにおいてなのか、本文は今日までの中国と日本学者の研究成果を踏まえ、できるだけ詳細な資料を使用して、孔子の本来の姿を再現し、今日における孔子の思想とその実践の意味をもう一度問い直そうとする。

キーワード：孔子、儒教、儒学、儒家、中華文明、有教無類

目 次

はじめに

I 孔子の時代と生涯

II 孔子の生活環境とその影響

III 孔子の教育実践とその弟子

IV 孔子の教えと思想『論語』

はじめに

孔子とはいったいどんな人物なのか、そして孔子思想の本質はどこにあるのか、それらはいずれも非常に大きな質問である。孔子死後、2千年の間に弟子たちや後世の儒学者、哲学者たちによってずっと問い続けてきたが、未だに解明されたとはいえない問題でもある。それを研究する学問は中国で「経学」という独特の学問体系を成していたにもかかわらずだが。孔子の思想とは何かを問うのは、孔子の言論を集めた儒学の始源といわれる『論語』に端を発する儒学の本質に迫るに等しいからである。

儒学は日本では儒教と呼ばれ、宗教扱いにされ、教祖、教典がない故、「沈黙の宗教」（加地伸行）とも言われるようになった。中国では古代に仏教、道教に儒学を列べさせて、「三教」と呼ぶ人もいたし、近代には入った以来、儒学を孔（子）教とする動きも一時にはあった。しかし、結局、長続きはせず、いつのまにか消えて無くなった。中国人にしてみれば、儒学はあくまでも文化で、一種の思想体系であり、自分の思考様式や行動パターンまで影響していて、限りなく宗教に近い存在かもしれないが、宗教ではない。

しかし、1960年代以降、資本主義的な富の生産システムを欧米を凌ぐほど、高度に発展させていく日本が彗星のように現れたので、マックス・ウェーバーが解明した欧米の成長を遂げさせたプロテスタンティズムの倫理に類似したものは日本にもあるだろうという推測が急に力を持ち出し、資本主義の発展を支えた職業的倫理の探しが始まったのである。「イギリスの資本主義を新教資本主義というべきであるなら、日本の資本主義は儒教資本主義ということが出来る」①と断言した森嶋通夫がその代表である。

さらに、このような考え方が、日本の経済発展だけでなく、台湾・シンガポール・香港・韓国など、急速な経済発展を遂げた国や地域とも結びつけて説明しようとする動きが急速に広がった。レジ・リトル、ウォーレン・リードがこの四の国と地域のことを分析して、「日本の成功だけでは達成しえなかったものまでをも可能にした。まずはじめに、日本独自のものではなく、儒教の伝統文明に密接に結びついた経済戦略が成功をもたらすという実例を示した」と解釈して、「日本の成功は近隣の儒教諸国と同じ文化を共有していることに基づく」②と指摘した。彼らが言おうとすることは、二人の共著の書名の副題によく表している—『儒教ルネッサンス—アジア経済発展の源泉—』。

程なくして、その動きは中国大陆にも伝わり、文化大革命（1966-1975年）期間中に木っ端微塵に批判され、地にまで叩き落された儒学が経済発展に寄与できるという情報が中国人を大いに刺激し、灯台下暗しという自責の念に駆られて、『孔子と商戦倫理』や『儒学と経済発展』といった研究が盛んに繰り広げられた。

しかし、いずれの研究も、冒頭のような質問を避けて、恰も自明のごとく孔子曰く、という形で展開されている。孔子の思想や儒学の本質自体が不明瞭のままでは、儒教と資本主義の関連性などについては議論のしようもないであろう。ましてや、中国で生成し発展した儒学精神はなぜ、2千年もの間に浮き沈みながら、中国の経済発展に、今日ほどの貢献をしてこなかったかという素朴な疑問も持ち得ない今時の学者の精神構造は、儒学の精神すら理解していない現われであろう。

本文は今日までの中国と日本学者の研究成果を踏まえ、できるだけ詳細な資料を使用して、孔子の本来の姿を再現し、今日における孔子の教育思想とその実践の意味をもう一度問い直そうとする。

I 孔子の時代と生涯

1. 孔子誕生の時代背景

中国人は自分の国のことを「中央王国」(The Middle Kingdom)と呼び、「普天之下、莫非王土。率土之濱、莫非王臣。」(天が覆っている限りの土地はすべて王の土地であり、また、土地が続く限り、どんな辺地に住んでいても、王の臣でない人はない。『詩経』小雅・北山)とまで信じ込んでいた。エジプト、メソポタミア、インダスと並ぶ中国の黄河文明は、およそ紀元前3-4千年前に、中国北部を北西から南東へと流れる黄河流域の、農耕に適した肥沃な黄土地帯(「中原」)に成立し、青銅器、甲骨文字、城塞都市、神権国家を有していた。

しかし、その時代の国家においては、あまりに広大すぎて、今日のように明確な境界領域内を支配するいわゆる領土国家ではなかった。後々まで城壁で囲まれた都市のみを支配する都城国家にすぎなかった。そして、都と呼ばれる一つの都市が中心に、一つの国家を形成し、その周辺にいくつかの衛星都城を支配して、さらにその周辺の村々を従えていたのである。逆に言えば、都城の城壁の外は、基本的にはいずれの国でもなく、その国の上に君臨する王の土地であった。

それゆえ、古代中国においては、このようなばらばらの都城国家を領有している諸侯は、同じ民族としてその先祖の伝説は共有する。さらに、この先祖と、そのさらに昔にあって、今も天下を支配するとされる天(帝)を祭る必要があり、この権限と義務は、諸侯を統率する帝や王に付託されて、王や帝の独占特権となったのである。

伝説によれば、およそ紀元前20数世紀ころに、堯が帝となって、歴法や職分を定めて政治の基礎を確立して、帝位を有能で孝行な舜に禅譲した。諸制度を整備して中央集権化を図った。しかし、大雨が続き、河川が氾濫して、高山丘陵も水に没し、水勢は天に至るかと思われた。このような大洪水に悩まされた舜は、夏族の禹に治水に当たさせた。禹は十数年の歳月をかけて支流や放水路を作り、水の流れに沿って、すべて東のかた海に注がせ、九州の水土を治め、人民もようやく生きる道を回復した。禹は最後に杭州湾に臨む会稽の地に至って、水土を治め終わったことを、舜帝に報告した。治水の手柄を認められて、堯から帝位を禅譲された。有能な禹が登場して、夏王朝の幕開けとなった。物資流通を促進し、人民の生活を向上させた。しかし、禹が没すると、その息子の啓は禅譲や首長選出するといったそれまでの習慣を破って、自ら首長の地位を継承した。それは中国で最初の世襲制とである。その子孫も、代々、歴代王位を継いだ。

しかし、第17代になると、暴虐の桀王が登場し、暴政を行なったため、商国の湯王が天に代わって道を行い、諸侯を率いて桀王を放伐して、夏朝を滅ぼした。紀元前1600年ころ、湯王が代って殷朝を興し、都を「亳」に置き、国号を商と定めた。以後、黄河の氾濫を避けて、たびたび遷都し、盤庚が殷に都を遷したのは紀元前1300年ごろであった。殷は文物などによって裏付けられる最古の王朝である。「殷墟」(殷の跡という意味で、河南省安陽、小屯付近)から次々に発見さ

れた亀甲獣骨文字を研究することによって、その実在がほぼ確認された。しかし、これも、紀元前1090年ころ、第17代の紂王が酒色に溺れ、暴虐の政治を行ったため、人々の心は、周の文王に集まっていった。さらに、20数年後の紀元前1060年ころ、文王の息子武王は紂王を伐って滅ぼした。

こうして、この武王によって興された周朝は都が鎬京（現在の西安市）に置かれ、殷王朝の制度を受け継いで大変立派な制度や文化を創出して、孔子が理想として仰いだのである。

しかし、周朝もまた、それまでの諸王朝と同じく、天子と名乗って、諸侯を統率して、当時、中国北部を中心に散りばめられた大小およそ1800百の国々の代表で中心となった。その後、周一族の関係が次第に薄れて、諸侯間では領地を巡る紛争が後を絶たないため、周王の政治への不満が高まり、厲王の暴虐を振るったため、周朝が衰微し、さらに、後に都に侵攻してきた少数民族の犬戎によって幽王が殺される事態まで発生した。周朝再建のため、平王は鎬京から洛邑に遷都した。それを境に、それ以前の時代を西周、遷都以降の時代を東周と呼ぶ。

遷都した際に、成王は弟の周公旦の長男・伯禽を遣わして、殷の旧属国の一部に衛星都城を新たに建設させて、移民を行なった。これが後に孔子が生れることになる魯国である。都を曲阜に置いた魯は、周王室の多くの文物や書籍、またそれを管理する役人を分けてもらい、春秋戦国初期には大国に伍した。

その後、個々に独立自存していた小国は、諸国家相互の戦争による統廃合が繰り返され、孔子の時代までには、周朝は著しく弱体化し、東の大国の齊・魯と、西の大国の晋の対立に、極西の大国の秦と、南方の大国の呉・越・楚の三国がからまり、この国々の間で衛・鄭・曹・蔡・燕・宋・陳などの中規模国々、さらにその他の百以上の小国がうごめいているというような情勢になった。時代は春秋戦国時代に突入する。

2. 孔子の誕生

覇を争う乱世へ突入、下剋上の殺戮が横行

前述のように、周文王（姫伯）が「智哉文王、出千里之地而得天下之心」をして開いた周朝は300余年を経て、穆王の死後、不肖の王が続き、聖賢の君がなく、大学の道が行えず、礼楽教化が興らずして、臣が君を、家臣が大夫を殺す事件も多発し、諸侯は天子に楯突き、また、互いに勢力を競い、利を争って次から次へと戦争を起こした。理想的な社会の周朝が崩壊し、中国は春秋の乱世に突入した。

井田制の崩壊

良き制度には、其れ相応の良き社会的道德状態と相まって保たれるものである。社会道德が衰退すれば、良き制度も存在する基盤を無くし崩れてしまう。中国上古時代の井田制はその格好の例である。上の者は民を考えずに、恣に課税し、搾取をした。下の者は公田での作業をサボっ

て私田に精を出して、私財を増やそうとした。公田での収入が日増しに減るため、井田制を廃止し、あぜ道を作り、土地の自由売買も認められ、均等を保とうとする井田制度がすっかり崩壊した。

教育弛緩

「建国君民、教学為先」を掲げた周朝には「家に塾あり、党に庠あり、術に秩あり、国に学ある」（禮記・学記）で学校制度が整備され、全国の津々浦々に教育施設が設けられていたため、教化が大いに進んだ。しかし、春秋戦国の時期になると、諸侯が互いに征伐を強行して風紀が乱れ、学校も廃れてきた。その結果、民が愚昧無知になり礼儀知らずになり、インテリと自負する賢大夫らも礼を疎かにし忘れた。

王官失政

下剋上が流行、クーデターや反乱が相次いで発生し、国を追われる王侯、クーデターで罷免させられた貴族などは一夜の内に庶民に転落した。多くの学問を身につけた貴族や知識人が野に降り流離い始めた。周朝の典籍、文献も官府から民間に流れだした。「天子失官、学在四夷」（天子の職員が散逸したため、学問は四方に散らばった）とはその時代の事をいう。

塾教育の新興

公教育制度が廃れたため、私教育が勃興してきた。個人で教室を開き学生を集める「塾」方式で教育するような方式が取られてきた。孔子はこの塾方式の創始者と言われている。「有教無類」を主張し、庶民教育に力を注いだ。

士の活躍

塾というところで私教育を受け、教養を身につけた庶民は力を持ち出し、新たに士として認められてきた。士と言われる新興階級は時代を先取りして、社会の変化をいち早く感知し敏感に対応した者である。強烈な使命を負い、執政の資質を持ちながら、恒産、恒位がないため自分の抱負を実現できない。従って士は塾を開き自分の理論を説き、方々遊説して政治にコミットしようとする。変法を力説するこの人達は周朝制度の直接の破壊者となる。孔子の政治主張とは反対しているが、変法の名人で士の代表である商鞅、李悝、呉起などはみな孔子の孫弟子にあたる。

3. 孔子の家系

孔子は殷人の末裔で、『史記』によれば、その先祖は湯まで遡れる。周の武王が殷を滅ぼした後、微子啓を宋の領主に封じた。啓の死後、宋は啓の実弟の微仲に譲られた。微仲は孔子の嫡祖にあたる。微仲の直系子孫である正考父は孔子の七世祖で上卿になり、連続して戴公、武公と宣

公の3代を補佐した元老である。地位が高くなるに連れ、正考父は益々謙虚になり、官位が高ければこそ謙虚になれ、という意味文字を鼎（煮炊き用の三脚のナベ）に銘文して家訓とした。

正考父嘉の息子孔父嘉は孔子の第6代目世祖で、始めて孔という姓を名乗った。しかし、孔父嘉は内乱で殺され、息子の木金父は戦乱を避けて魯の国へ避難していき、諷（今日の山東省済南あたり）に移り住み、孔氏系の家運が傾き、平民となった。孔父嘉の5代目に紇が生まれてから、漸く孔氏系が再び興隆した。紇は孔子の父親で、字叔梁、魯国の諷邑大夫になり、武勇で百人力の持ち主で有名である。『左伝』には叔梁紇の武勇談を二つも記録している。魯襄公10年、隣国との戦争で、敵の罨にはまった見方の兵士を救うため、降りかかった城門を一人で支えて、入城した兵隊が無事に城外へ退かせた。さらに、魯襄公17年、齊国との戦争で包囲された魯の部隊を300人の兵士を引率して、夜中、敵陣に突入し、齊軍の包囲網を打ち破ったという。

叔梁紇は施という女性を娶り、9人の女の子をもうけたが、男の子はなかった。すでに古稀に近かった叔梁紇は顔氏に求婚した。顔氏には娘が3人いて、末娘は征在という。顔夫は娘達に向かって、「諷大夫の父と祖父は平民だけど、聖王の末裔である。叔梁紇は背が高く、人より優れた力を持っている。僕は大変気に入っている。やや年が取っているのは玉に瑕だが、君たちの中に、彼の所へ嫁に行きたい人はいるか」と聞いた。長女と次女は何も言わなかったが、末娘だけ、「聞くまでもないでしょう、父親の言う通りにいたします。」と言ったので、父は末娘を叔梁紇に嫁がせた。

4. 孔子の生涯

謎めいた誕生

叔梁紇は古稀に近い年齢で年頃の征在と結婚した。夫婦の年齢は近いのが理想的であるから、あまり離れすぎのは当時の習慣に合わない。司馬遷は『史記』の中で当時の伝説として「紇と顔氏女が野合して孔子が生まれた」と書いたのである。叔梁紇が征在と結婚して、当時の習慣に従い、諷邑の尼丘へ行き、山の神に子授けを祈った。臨月の時にまた、尼山へ子どもができたたと報告して、感謝すると同時に、安産を祈る。そして、帰りに付近の山洞で休んだ所、孔子がそこで生まれたのである。魯襄公22（DC551）年の事で、その洞は後に「坤靈洞」、「夫子洞」と呼ばれている。

孔子は生まれたときに頭のうえの方がへこみ、周りが高いので丘と名付けられた。字は仲丘である。仲とは次男の意味で、異母兄として、伯尼がいるから。伯は一番で、仲は二番である。

貧困の幼少期

孔子が生まれて3年目、梁叔紇が亡くなり、防山に葬られた。寡婦となった征在は、忌避のためその葬式にも参列しなかった。征在は孔子を連れて諷邑から実家のある曲阜の闕里に戻った。大黒柱を亡くした征在は、祈祷師をしながら、細腕一本で孔子を育てた。母の仕事をみながら、

幼い孔子も次第に礼楽についての知識を身につけ、友達と遊戯の時はよく、祭器を並べたりして、礼楽の真似事をして遊んだ。「吾は少くして賤し。故に鄙事に多能なり。」(論語・子罕)と後に孔子はそのときの事を思い出して語っている。生活のために色んな仕事をしたのである。倉庫の管理人や羊や牛等の世話もした。艱難の生活の中で生きる知恵と力を獲得した。

貧しい生活で健康を損ない、母親の征在は孔子17の時に亡くなった。父親と一緒に埋葬しようと思った孔子は父親の墓地の位置を知らないのに、人通りの多い道路に母親のお棺を置き、父親の墓地を知っている人からの情報提供を待っていたのである。そして、母親の生前の親友と名乗る人から、正確な場所を教えて貰って、防山に父親と母親と合葬をした。

好学の青年期

「吾、十有五にして学に志す。」と孔子は論語の中で語っている通り、十を過ぎてからは学問に目覚め、学問の道を究めようと努力し続けた。「生而知之」(生まれながらにしてこれを知る)と孔子の事を後の人はよくこう言うが、此处で言う「知る」とは、すべて何もかもお見通しで先見したと言う意味ではなく、幼いときから命の尊厳を悟り、そして、それが常に進歩し向上するように修練を重ねる努力を怠らないと言う意味である。学びて厭わず、四方に賢者を訪ね、いろいろな人に師して広く学習した。

27歳の時、孔子は隣国の郊国の君子に仕官の職名について教えを乞うた話しは有名である。魯国の大夫の招きで宴会に出席した郊子は席上、古の君主少昊は何故、役職名に鳥の名を付けたのかという質問に、黄帝、炎帝から上古の伝説を引用しながら解説し、さらに、鳥についても詳しく説明をした。それを聞いた孔子は大変感服し、わざわざ、郊国を訪れ、上古の役職のシステムや官名について郊子に丁寧な教えて貰った。

『論語』には孔子が始めて魯国の大廟の祠祭を司る事を負かされたとき、大廟に入ると、儀式について一つ、一つ先輩に質問をして、謙虚に学んだと言う逸話が記録されている。そして「是れ礼なり」と孔子は言った。

孔子は師襄という有名な先生に琴を習った。初歩の入門が終わって十日も経ったのに、孔子は先へ進もうとしない。師襄はそろそろ新しい曲を、と言ったら、孔子は「吾は既にリズムを身につけたが、演奏の手法はいまだ未熟であるから」、と答えた。さらに、十日過ぎ、「もう技術もしっかり身につけましたから、新しい曲に入りましょう」と師襄が勧めたが、孔子は「まだその曲の真髄を体得していませんから、もうしばらく続けさせて下さい」、と懇願した。しばらく経つと、曲の精神も悟ったと、師襄は次へ進もうとしたら、孔子は「未だにその人を見ず」と言って、さらに稽古を続けていた。その内、見る見るに孔子の琴を弾く態度が厳かになり、時には思いに耽ったり、遠方を凝視したりしてきた。ある日、ついに師襄に「吾は遂にその人を得た」と孔子は言い出した。「この曲の作曲者は色が浅黒く、がっちりしたタイプで、目が明るく、天下を抱いて四方を支配して居られる者ですので、周の文王でしょう。」それを聞いて師襄は「まさに

その通り、我が師がこの曲を伝授してくれた時に、それは『文王操』であると説明してくれた」と言った。

孔子は19歳の時、宋の丁官氏の娘と結婚した。名前は分からないが、1年後に長男が生まれた。出生祝いに、魯国の君主である昭公から鯉が賜った事にちなんで、長男に鯉という名を付け、字は伯鯉である。長男は伯であるから。後に長女も生まれたのである。

不惑の壮年期

「三十にして立つ」と孔子は自分の生涯を回顧して語っている。「立つ」とは、専門や事業に専念し不転の決意をし、自分の選んだ道で安心して立身する事ができるという意味である。孔子は15年間の修業を積んで、道徳や専門技能等を大いに進歩し、これでこの道を究めて一生ささげて不転の決意をして、私学を開いて研究と教育を始めた。

魯大夫孟僖子が亡くなる前に息子に孔子の所へ礼を学ぶようにという遺言を遺した。それを守って孟僖子の息子南宮敬叔ら二人が孔子の門をくぐった。それは孔子の最初の弟子になる。それから、孔子の所へ学びに来る人は後を絶たない。その年に、南宮敬叔に伴って孔子は周の都洛邑へ遊学し、礼についての教えを受けた。そこで、見識豊かで、古代の礼儀制度に精通し、後に中国在来教の道教の創設者として仰がれる老子を訪ね、貴族の礼儀制度についての話を伺ってきた。

周から帰国した孔子は礼を知っている者として声望を高めて、入門したい者が次から次へと現れてきた。子路、子有、顔路等はみなその頃に孔子の門下生になったのである。

孔子35歳の時、季平子と魯昭公が反目して内乱が起こり、季平子、季孫子、孟叔子の三恒連合軍に敗れて、魯昭公は齊国へ亡命した。それから7年間、魯国には国君がなく、混乱していたため、その年の冬に、孔子も齊国へ避難した。弟子達を連れて齊へ向かう途中、泰山のふもとを通りかかった時、一人の老婦人が墓に向かって非常に激しく泣いていたのを目撃した。不憫に思って、弟子の子路がわけを聞きに行ったら、婦人は「以前、姑が虎に噛み殺され、夫も虎に噛み殺されましたが、いま又息子が虎に噛み殺されました。」と語った。なぜそんなに危険なところを選んで住んでいるのか、とさらに聞いたら、「此処には苛政がないから」と答えたのである。そこで孔子は悟った、「苛政は虎より猛し」と。

齊国で孔子は齊昭子の世話になった。ある日、齊の国君である景公は孔子に理想的な政治のあり方について質問した。孔子は「君君、臣臣、父父、子子」と答えた。つまり、「君は君らしく、臣は臣らしく、父は父らしく、子は子らしく」しなければならないのである。それを聞いて景公は大変孔子のことが気に入って、土地を与えて役人に採用しようとした。ところで、重臣たちが反対したので実現できなかった。さらに孔子の言動を快く思わない齊国大夫が孔子に被害を加えようとしたので、孔子は2年ほど生活していた齊国を離れ、魯国に戻った。

魯国では大夫や家臣が力を頼って主君をないがしろにし、僭越して権力を恣に振るったので、

政治秩序は大いに混乱していたため、魯国に戻った孔子は、有力者の推輓を断って、出仕せず、自分なりの自覚を持って教育に専念していた。40歳を迎えた孔子は益々信念を固め、不惑の域に達した。「四十にして惑わず」と孔子は言っているが、つまり、色々な誘惑に打ち勝って、自分の信念を貫くことである。大きな勢力を有する大夫の陽虎は孔子と面会し、孔子の名声を借りようと企てたて、部下に孔子のところへ子豚一頭を運ばせた。大夫に物を賜った士が自ら出向いて感謝するのが当時の礼儀であるから、礼儀に従ってお礼に来た所へ孔子に合おうと言う計算であった。しかし、孔子は陽虎が留守しているのを確かめてお礼に行った。しかし、よりもよって途中で陽虎とばったり出会った。仕方なく孔子は通り一遍のお礼をした。陽虎は孔子に仕官を勧めたが、孔子は信念を曲げずに婉曲に断った。

魯国の宰相

政治秩序の混乱している期間中、孔子は潔く政界から身を退いて、各地に散逸していた詩や歌を添削、編集し、書、礼、楽等にも手入れして、文化財の整理に努め、弟子の教育に力を注いだ。孔子は「教えありて類なし」と言う原則を打ち出し、出身、国籍等に関係なく、勉強する意思のある人なら、授業料の代わりに簡単な進物一干し肉の束を持ってきてくれれば、誰でも入学することができる。魯国だけでなく、齊国や晋国から遠く楚国や呉国まで、全国各地から、弟子がやってきたのである。

「五十にして天命を知る」。50になってから魯国の政治情勢が安定してきた。魯国から反乱者が追い出され、季恒子が政権を司り、孔子は中都（今の山東省汶上県の西）という地方の長官に任命された。生涯初めての仕官した孔子は全力を挙げて政務に勤め、混乱した中都はよく治まり、「長幼の別によって食事を区別し、体力に応じて仕事割り振り、道では男女は別々の側を歩き、路上に落ちている物は誰も拾わない」という理想的な社会に変貌した。「一年にして、西方諸侯はこれに則る」ようになった。つまり、立派な成績を上げたので、西の地方諸侯はみなそれを手本として見習ったのである。

始めて仕官で実務家の手腕が高く買われて、翌年、土木建築や厚生を担当する小司空に昇任、さらに1年後は、全国の警察や裁判を司る司法と治安の最高責任者である大司寇に抜擢され、55歳の時はついに宰相代行として国政を任されるようになった。大任を与えられた孔子は政権の安定のために、一連の政策を採った。まず、僭越して魯国政治の実権を握っている三恒氏の権力を削ぎ、その力を抑制しようとした。孔子は弟子の子路を季氏の長老として送り込み、叔孫子の領地に構えている城壁を取り壊させ、続いて季孫子の城壁も取り壊させた。一気に孟孫子の城壁まで取り壊そうとしたが、「城壁を無くすと、隣国の齊からの侵入が防げなくなる」という理由で、孟孫子が猛烈に反対したので、実現できなかった。しかし、三恒氏の二人の城壁の取り壊しに成功したので、魯国の定公の政権基盤を固めた。

大司寇に任命された時、さすがの孔子も喜びの色を隠さなかった。それで弟子の一人は「君子

は禍を恐れず、福を喜ばずと仰せられたのですが」と訝しげに聞いたら、孔子は、「その通り、吾はそう語った。しかし、同時にまた、高きにいて、身分の低い士を礼でもって接することも、また楽しいとも言ったよ」と答えた。魯国の宰相代理3ヶ月ほど勤めた。その間、魯の国民が道徳を重んじ、秩序を守り、大いに魯国の政治や経済が発展した。

魯国の急激な成長ぶりを目の当たりにして、このまま発展していけば、覇権を求めて、隣国に被害を加えるのではないかと、隣国の政治家が不安し出した。そこで齊の国君が懐柔策を練り、魯国君に美女や馬等を送った。魯国君はそれを受け取り、毎日美女の舞を楽しみ女楽に耽って政治を疎かにした。それを見た孔子はしばらく静観してから、つい魯国君を見切って、魯国を離れることを決心した。

列国周遊

孔子の生きた春秋戦国時代は中国史上希にみる混乱な時期である。相次ぐ諸侯間の征伐は一向に収拾を見ず、国は長い戦争で疲弊し、民は度重なる戦乱で塗炭の苦しみを舐めさせられている。弟子を連れて、魯国を後にした孔子は民心を安定させ、民の難を救うため、自分の政治主張である「仁」で天下を易えようと、それを受け入れてくれる主君を捜し求めて、55歳の年から、14年にもわたる列国周遊の放浪生活を始めた。

孔子一行はまず衛国に立ち寄った。子路の義理の兄顔濁の家に泊まった。衛の靈公は魯国にいた頃の俸禄はどれほどかと聞いたら、孔子が6万斗と答えたので、そのまま6万俸禄を支給するように命令した。しかし、しばらく経つと、衛靈公は讒言を聞いて、近衛兵に武器を持って孔子の行動を監視するように命じた。厳重な監視下に置かれた孔子は、これ以上居られなくなったと判断して、10ヶ月滞在した衛国を出た。

陳国へ行こうとして、匡という町を經由した時、馬車を御していた弟子の顔刻は、城壁の崩れた所を鞭で指しながら、「前回来たときはそこから入ったのです」と話した。それを聞いた匡人は孔子の一行を陽虎だと勘違いして、彼らを包囲し監禁した。陽虎はかつて此処匡の町で強盗殺人等の悪事を働き、このあたりを荒らして、匡の人々を散々苦しめた。孔子はあまり陽虎と容姿があまり似ていたので、つい陽虎が戻ってきたと、匡人たちは激怒して、孔子一行を5日間にもわたって取り囲んで攻めようとした。弟子たちは慌てふためいた。しかし、孔子は一向にあわてずに落ち着き払って、「文王は既に没したれども、文慈に在らずや。天將に斯の文を喪ほさんとするや、後死の者、斯の文に与ることを得ざるなり。天の未だに斯の文を喪ほさざるや、匡人其れ予れを如何」と言って弟子達を元気づけた。さらに、従者を衛の大夫寧武子の所へ派遣して、彼の臣下とさせた。それで匡の人たちもやっと、この一行は陽虎ではないと認めて、包囲を解いた。

匡を離れた孔子一行は蒲という所にしばらく滞在してから、再び衛国に戻った。その時、衛の実権は靈公夫人南子によって握られていた。孔子が到着と聞いた南子は是非とも会いたいと願

い出た。しかし、道を歩くときも男女が別々の側を歩くのが美風淳徳としていた時代に、不品行が評判で、噂の絶えない南子が孔子と単独会見を望んだので、弟子達が大変心配した。一番の愛弟子の子路も必死に反対したので、孔子は「自らに、もし良くない行いがあれば、天が私を見捨てるだろう、天が見捨てるだろう」と誓った。何らかの手がかりになるのではかと期待している孔子は、衆人の反対を押しつけて、拜謁に出かけた。会見は南子の家の中で行われた。孔子が門をくぐると、北へ向かって恭しく敬礼し、丁寧に挨拶をした。南子は薄い帳の中で挨拶を返し、腰に付けた玉の飾り玉が触れあって、さわやかな音を立てた。何とかして会見は無事に終わった。

ところで、謁見してしばらく経つと、今度は衛霊公からドライブの誘いが来た。南子夫人と一緒に車に乗って市内見物に行くから、君も来い、と言うのであった。後に続く車に孔子を乗せて、市中を回って、賢者の孔子を見せ物扱いにしたのである。後日、孔子は当時の様子を振り返って、「吾はまだ、徳を好むことが女色を好むように熱心な人を見たことがない」と言って、たいへん恥じていた。

再び衛国を離れて曹国を通過して宋国へ行った時、孔子59歳になった。弟子達と大きな木の下で礼のけいこをしていたところ、宋国の司馬(軍事長官)の恒魁が部下を連れて孔子を殺しにやってくるとの情報が入ったので、孔子一行は素早く片づけてその場を離れた。一步遅れて到着した恒魁は、怒りにまかせて、その大木を切り倒して、孔子を絶対に生かしておかないという決心を表した。恒魁はたいへん贅沢な者で、自分のために生前に石椁(石製の外棺)を3年がかりで作らせた。孔子はそのことを強く批判したのが遠因である。弟子達は心配して早く宋から離れようと孔子を催促した。しかし、孔子は落ち着き払って、「天が我が身に徳を授けられた。恒魁ごときが我が身をどうしようぞ。」と言った。

鄭国に辿り着いた孔子は弟子達とはぐれてしまった。孔子は一人城郭の東門にたたずんでいた。弟子達が手分けして孔子を捜したら、ある鄭国人が子貢に言った。「東門にあなた達が捜しているような人がいるよ、額は堯帝に、首筋は臯陶に、肩は子産に似ている。しかし、腰から下は禹王より3寸ほど短く、家を喪った犬のようにがっかりしていたよ」と。孔子はそれを聞いて愉快そうに笑った。「容姿はともかくも、葬家犬とは、うまい表現だ。まさにそのとおりではないか。」

鄭国からさらに陳国に渡って、陳国に3年滞在した。その間、呉国王の夫差は陳国を征伐するため、戦を挑み、陳国の城を3ヶ所奪い取って、兵を引き上げた。そして、また晋国と楚国が陳国を巡って戦争し始めた。その際に乗じて、呉国はまたまた陳国を攻めてきた。戦乱続きの陳国では、自分のやろうとする教育も度重なる戦争によって幾度も中断させられた。仕方なく孔子は陳国を離れ、蒲を経由して再び衛国に入った。孔子が戻ってきたと聞いて、衛霊公はたいそう喜んでいて、わざわざ郊外までかけて孔子一行を出迎えた。しかし、いくら孔子のことを気に入っても、年を取った衛霊公はもはや孔子を用いる力はない。その情勢を悟り、孔子は「もし、私を用いてくれるなら、一年に効果をあげ、三年に大いに成果を上げる」と悲しそうに言った。

ある日衛霊公が孔子を呼び、兵法について聞いた。「祭礼についていくらか知っているが、軍事については学んだことはない」と孔子が応じた。そう話しているうちに、ちょうど雁の群が空高く飛行していったので、衛霊公は顔を上げて飛行している雁を眺め、孔子の話しに耳を貸さなかった。ある日孔子は「帰らんか、帰らんか。吾が故郷の若者達は、志は雄大ですけれども、粗略です。美しい錦になっているのに、裁断して衣服にする方法を知らないのである」と、故郷魯国のことを思い出して、帰国する決心をした。

60歳になった孔子は耳順になり、世の中の事を寛大にし、すべてのことに理解を示した。弟子の冉求が魯国に呼び戻された。子貢は孔子の気持ちを察して、冉求を見送る時に、「君が帰国して偉くなったら、必ず先生をお呼びなさいよ」と念を押した。

冉求が帰国した後、孔子はまた葉国へ渡った。葉公は政について孔子に聞いたら、孔子は「遠方にいる者を招致し、近隣にいる者を帰順させることである」と答えた。孔子の弟子の子路に「孔子はどんな人か」と葉公が聞いたのに対して、子路が黙って返事しなかったので、孔子が代わって答えた。「学問に発憤しては食事を忘れ、道を楽しんでは心配事も忘れ、やがて老いがやってくる事にも気づかずにいる人です。」

葉国を離れて蔡国へ行く途中、道に迷い、丁度、隠者風の人が二人並んで野良仕事をしているので、弟子の仲由が渡り場への道を訊ねていった。そしたら、隠者風の方は「馬車を御しているのは誰？」と聞いた、孔子ですと仲由が答えたら、「魯国の孔丘なら、渡り場の道を知っているはずですよ。」と言い、さらに「滔々と混乱して世の中には、誰もそれをただす力なぞないでしょう。暴君を避けて転々とするよりは、乱世を避けた方が良いよ」と手も休めずに続けた。弟子からそのお話を聞いた孔子は「人間は鳥獣と共に暮らしては行けないから、人間と一緒に生活しなければ、どこで生活するでしょう。天下に道があるならば、四方八方へ奔走して、自らの道を持って天下を易えようと試みなくても済みますよ。」と嘆いた。

蔡国に3年位いたら、孔子は陳国へ移ろうと蔡と陳の国境へ移動していたところ、楚国からの招聘が届いた。大国の楚へ孔子が行ったら、自分たちに不利益が生じるのではと心配した陳と蔡の大夫が孔子一行を国境の荒野に取り囲んで兵糧責めをかけた。数日経って、弟子の多くは空腹で倒れた。しかし、孔子は依然として詩を朗読したり、琴を弾いたりして悠々自得していた。子路が空腹を叩いて「教養をつんだ君子でも困窮する事があるのですね」と悶々と言った。孔子は「君子ももちろん困窮する。だが小人は困窮するとデタラメになるよ。」と言った。

冉有が季氏の軍隊を統率して、斉国軍を負かせた。季康子が冉有に「君の軍事才能は生まれつきですか、それとも生後修得したのですか」と聞いた。冉有は「自分は孔子から教わりました。」と答えた。それなら孔子を呼び戻そうと、季康子がお土産を持って、衛へ使者を出して孔子を魯国へ迎え入れた。

68歳で、孔子は漸く14年間も離れた故郷の大地に再び足を踏み入れた。

述べて「六経」を作る

魯国に戻った孔子は体力の限界を感じ、自分の悟った政治と生命の真髓を後世に伝えるために、限られた時間を有効に使おうとした。弟子に教えながら、自分の政治主張を記録する方法を模索した。彼は弟子たちに口述し、記録をとらせて、儒学の教典と言われる「六経」を完成させた。

周朝の式微により礼楽が廃れ、『詩』、『書』も散逸してしまった。孔子は夏・商・周3代の冠婚葬祭の儀礼や礼制度について詳細に考察して、『礼記』を編纂した。また、冠婚葬祭に伴って演奏される雅楽、民間に散逸してある曲、楽器音楽などを広く集め、整理して、上古時代の楽譜を再現して演奏し、『楽』を編んだ。

孔子の時代に上古から伝わってきた民俗、習慣を謳った詩が3千編ぐらいあった。孔子はそれらの整理に手がけた。まず、重複した部分を削除し、殷周から周の幽王時代までの部分の中から、大衆の教化に有益なもの300首を選んで『詩経』を編纂した。

いにしへの聖人とされる舜・堯の時代から周にかけて、歴代の聖人、王者の誓った言葉、及びその人達の行動、政令、訓辞、地理、政治に関する文献を整理して、それを後世に伝えようと決心した孔子は信憑性の高い内容を選んで、削除、整理して、上限を舜堯時代から、下限を秦の穆公まで、年代順に大事件を整理して、『書経』を編纂し、教科書としても使ったのである。

『易』は中国文化の源と言われるほど「天」について語る書籍である。中国の儒学と道教はその書物からヒントを得ていると言われる。非常に難解である。孔子はとてこの『易』を愛好し、「韋絶三編」と木簡本を綴じる紐が3回も切れてしまうほど読破して、分かりやすい『易伝』を作った。故に後世の人はこの『易』を垣間見て理解することができた。

自分ではとて仕官して、自ら手本を示すことはできないけれども、自分の主義、主張を何とかして後世に伝えようと、孔子は歴史資料に基づいて『春秋』を執筆した。『春秋』とは魯国の隠公元年から242年間の歴史事件を、1800余項目に記録した簡単な編年体式の歴史書である。しかし、その事項の一つ一つに孔子は自分の政治理想を寄寓し、理想と主張を込めて書いた。いわゆる「微言大意」つまり、歴史上小さな事実を取り上げて大きな局面に及ぼす影響を説くという、引伸拡大する手法である。一見極普通の日常茶飯事であるが、深い含意(大意)が込められ、間接な原因を直接な原因に結びつける表現法であり、広範な事象に対し、永遠に妥当な法則性をもたらせる飛躍的な論理で展開する論法である。「万物の散聚は皆『春秋』に在り」(史記)、『春秋』には「王道備わり、人事あまねし」(史記)、きちんとした史観で歴史を簡潔に書き記している。下剋上で君主を殺した臣下や諸侯で王を僭越した者、謀反者等をすべて道を外れた者を徹底的に暴いた。『春秋』ができあがり、乱臣たちはすっかり落胆した。「私を理解してくれるのは、ただこの『春秋』によってだろう。私を批判する者も、またただこの『春秋』によってだろう。」と完成後、孔子は述懐した。

辞 世

孔子の晩年に多くの弟子や友人が相次いで亡くなり、辛いことの連続であった。夫人はすでに魯国に戻る前の年に亡くなった。孔子が67の時であった。

魯国に戻った翌年、息子の孔鯉も亡くなった。ちょうど50歳であった。精神的なダメージがかなり大きかった。

孔子70歳の年、最愛の弟子顔回も亡くなられ、大きなショックを受けた。

孔子71歳の年、弟子の子路は衛国で義の為に身を捨てて最期を遂げた。その年に、孔子は死んだ麒麟を見た。魯の哀公の狩にお供した獵人たちは魯国の西で見たこともない奇怪な動物を捕獲したと大騒ぎであった。物知りの孔子に見て貰おうと都に運んできたから、見に行ったら、なんと麒麟ではないか。麒麟は目出度い瑞祥のシンボルとして崇められていたが、冷たくなった麒麟を見て、孔子はすでに自分の死期も近づいたと悟った。また、「吾は久しく夢に周公を見ないぞ」と悲しげに言った。

翌年の初夏、孔子は病に倒れた。弟子の子貢が見舞いに現れたとき、孔子は杖をついて、ゆっくりと庭先を散歩していた。「賜(子貢)よ、君はずいぶん遅かったのではないか」と子貢をたしなめた。そして、「泰山はいま崩れよう、梁の木はいま砕けよう、哲人はいま身まかろう」と詠って、はらはらと涙をこぼした。さらに「夏の時代、柩を東階段の上に置き、殷の時代、柩を堂の両柱の間に置く。さらに周人は西階の上に置くが。吾は昨夜、両柱の間に座って、みんなに祭られている夢を見た。自分は殷人の末裔だから」と話した。

それから7日後、孔子は辞世した。紀元前479年4月11日であった。

享年73歳。

Ⅱ 孔子の生活環境

1. 曲 阜 中国山東省の中部にあり、古代中国文化発祥地の一つである。隋代からはじめて曲阜県と呼ばれ、以後、幾たびもの変遷があったが、明代に孔廟を中心に県城が造られ、それが今日の曲阜城である。「阜」とは土山のことで、長さ7～8里(1里 約0.5キロ)、真っ直ぐでなく、うねりくねっているのが「曲阜」と呼ばれる。現在では曲阜市で、1982年、歴代文化都市に指定された。北緯35度、東経116度で、人口は約50万、うち孔姓家族は10万人以上に及んでいる。この人たちは孔林に葬られる権利があると言われる。農業中心の県で主な産物は小麦、高粱、落花生等がある。

2. 孔子廟 世界各地にいろんな孔子廟がある。普通、孔子廟というのは、孔子の古里曲阜にある孔子廟である。文廟、夫子廟とも呼ばれる。山東省曲阜城中部の西側にある。孔子逝去の翌年(紀元前478年)、魯国の哀公人は孔子の住んでいた家屋三間を廟に改築して、孔子の衣冠、車服、

礼器等の遺品を取めた。漢の高祖劉邦がここで孔子を記念する行事を挙げて以来、ここは孔子を偲び、記念する行事を挙げる場所となった。また、東漢の章帝から歴代の皇帝が廟の普請、再建工事をした。修繕、再建の度に規模が大きくなり、明代の正徳8年(1512)に、曲阜の中心部に遷った。現在の孔廟は清代雍正帝(1723)年間に完成されたものである。孔廟は膨大な建築群で、大成殿、聖跡殿、寢殿等の五殿と一閣(奎文閣)、一壇(杏壇)、一祠(崇聖祠)、二堂(詩礼堂、金糸堂)東西二齋宿所、一五御碑亭、五四門坊等からなる。黄色い瓦に赤い扉、彫梁画棟(梁に彫刻を施し、棟に絵が画かれている豪華な装飾である。)、中国伝統的な庭園構造で九進あり、全体の敷地は13万3千平米、南北1120米、東西は約151米、周囲は高さ3米の城壁に囲まれている。彫刻、絵画、書道等中国伝統文化が集大成した博物館とも言われている。

3. 孔 府 即ち「衍聖公府」である。孔子直系の子孫の住む邸宅と役所である。孔廟の東奥に隣接している。唐代まで、孔子の子孫は、孔子が住んでいたとされる闕里に住んでいた。46代の孔崇愿は北宋の仁宗皇帝からは、「衍聖公」に封ぜられ、宅地用の土地を賜った。宋の徽宗皇帝の時から世襲となって、邸宅も「衍聖公府」と改称された。明代に入ってから府内に官署を設置し、内部改造を行った。清代と中華民国時代に、数回修繕をして、役所と住宅とを兼ねた伝統的な建築群となった。敷地面積は16万平米あまりで、多くの建物には合計466間もあり、数々の門坊と広い庭付きの孔府は中・後・東西と三つの路(ブロック)に分けられる。中路は役所で、後路は住宅で、東路は一族を祭る家廟で、一貫堂及び使用人の宿舎で、西路は客間と書齋である。後ろの方は鉄山園という庭となっている。

4. 孔 林 曲阜城北にある孔子及びその子孫の墓と孔氏家族の墓地で、「至聖林」とも言う。孔子が逝去後、孔子の墓で3年の喪に服した弟子が、種々の木々を持ち寄って墓の周囲に植えたのが始まりで、長年、墓地の周りに柏、檜、柞が中心とする樹木が5万本以上植林され、鬱蒼と茂っている人造森林となっている。中でも楷樹は孔林のシンボルとされている。『史記・孔子世家』によると「孔子は死後、魯城の北、泗水のほとり葬られた」と記録されてあるが、当時は「墓而不墳」(墓は凸起しない平らな物で、墳は土を盛り上げて凸起する物である。)で、秦、漢代になるとその墓は隆起して、林守も増えた。孔林に周りに高さ3~4メートル、幅5メートルの扉が7キロ余りも張り巡らされた。孔子の墓は孔林の中央にあり、土を盛った高さ6メートル、直径約12メートルの塚で、馬のたてがみに似ているため「馬鬣封」と呼ばれている。墓の周りに享殿、思堂等の建物があり、墓前に明代建立の石碑は篆書で「大成至聖文宣王墓」と刻まれている。孔子の墓の東には、息子孔鯉の墓、南には孫の孔伋の墓があり、昔から「携子抱孫」(子を携き、孫を抱く)と呼ばれている。中国で幼児を大切に育てることを「携抱」というのもそこから来ている。

5. 闕里 曲阜の孔廟の東塀外にある孔子が幼年期に住んでいた所である。『史記・孔子世家』には、「孔子は魯の昌平郷諷邑に生まれる」と書いてある『史記』の注釈本である『索隱』にも「孔子は魯の鄒邑・昌平郷之闕里に居する。」と書いてある。闕里は元々魯城の南西のはずれにある小さな巷で、孔子の旧居は街の北端に位置している。闕里という地名の由来についても色々の解釈があり『水経注』によると、「孔廟南東五百歩ぐらいの所に双石闕がある。故に闕里という。」また、『史記・魯世家』では「場公が茅闕門を築り、蓋し闕門下にありて、その里の名、即ち闕里である。夫子の宅はそこにある。」と。今日の闕里には街の中心に明代に建てられた木製の牌坊が聳え立ち、柱に彫刻を施し、天井に絵で飾った四柱三門式の建築で、真ん中に「闕里」という金文字が大きく書かれている。

6. 杏壇 曲阜孔廟の中の大成殿の前にあり、孔子が弟子たちに学問を伝授した所とされている。『庄子・漁父』には、「孔子、緇帷の林に遊び、杏壇の上に休坐す。弟子は書を読み、孔子は、弦歌して琴を鼓す。」という寓話がある。寓話ではあるが、孔子が杏壇にて講義を行ったことをはっきり示しているから、宋代天禧3年の孔廟改築工事で、大成殿が後方へ移転され、その跡に杏壇が建てられたのである。現在の杏壇は明代隆慶3年(1569)に改築されたものである。青石の上に梁や柱に彫刻で飾った四角なる涼亭(吹き抜けのあずま屋)、黄色い瓦、朱色の手すり、柱の上に正方形の木を取り付け、軒先が高く反り返り、十字で結ばれる屋根という堂々たる中国古典式の建築である。亭内には「杏壇」碑と清代乾隆帝(在位1736~60年)の直筆になる「杏壇賛」碑の他に、明代のものとする楠柱が12本均等に配置され、柱と天井に盤龍の絵画が施されている。

7. 孔壁 魯壁とも呼ばれ、曲阜孔廟の後ろ東路の詩礼堂北側、孔宅故井の近くにある。魯壁の跡と伝えられている。現在あるものは後世が造った灰色の垣壁である。その前に「魯壁」と刻んだ高さ1.54メートル、幅0.64メートルの石碑がある。伝えるところに依ると、秦の始皇帝が焚書坑儒策を取り、儒学の書物を隠し持つ者には死罪に処すという命令を下した時、孔子九世孫・孔鮒は儒学の経書を自宅の壁中に隠して壁を塗り込めた。そして、孔鮒は礼器だけ持ち出して陳勝の蜂起部隊に加わったが、暫くして、また蜂起部隊を離れ、嵩山に隠居し、そこで没した。それから100余年後、前漢の武帝の時、魯の恭王が改築のため、孔子の旧宅を取り壊したら、これらの経書を発見したのである。これは「古文経」または「孔壁古文」と呼ばれるものである。後に、漢朝政権を篡奪した王莽はそれを利用して西漢の官学である「今文経」と対抗し、自らの政権の正統化を図った。それ以来、「今文経」と「古文経」の拮抗は2千数百年以上も続いていた。

8. 孔宅故井 曲阜孔廟の東路にある詩礼堂の後ろにあり、孔子が使われていたといわれる井戸である。明代に井戸の周りに文様の彫り込まれた石欄干が造られ、内側に「孔子故宅井」という

高さ1.43メートル、幅0.82メートルの石碑がある。井戸の深さは3～4メートルぐらいで、口は厚い丸い石で保護され、石の直径は50センチで、口面の厚さは13センチである。井戸の西側に黄色い瓦で覆われ、軒先の高く反り返った四角なる涼亭（吹き抜けの東屋）があり、亭内に清代乾隆帝の直筆になる「故宅井贊」四文字、及び四言八句の詩が刻まれた石碑が立てられている。「既食飲水、曲肱樂之。既清且渌、汲繩至茲。我取一勺、以飲以思。嗚呼宣聖、實為我之師。」乾隆帝の孔子に対する崇敬と追慕の念がうかがえる。

9. 孔子墓 曲阜孔林の中央にある。『史記・孔子世家』によると「孔子は死後、魯城の北、泗水のほとり葬られた」、「魯は世世相伝、歳時を以て孔子塚を奉祀するが、諸儒は亦孔子塚に於いて講礼、郷飲、大射をする。」と記録されてある。当時の記録によると「孔子塚は大きさ一傾(1.5アール)である」。孔子墓は最初、斧を置いた形の土を盛り、高さ6メートル、直径約12メートルの煉瓦で造った祠であった。馬のたてがみに似ているため「馬鬣封」と呼ばれ、封建時代に特殊な尊貴の建墓形式である。「墓而不墳」で、秦、漢代になると墳墓は隆起して、林守も増えた。数キロにも亘る赤い塀で囲まれる墓の周りに享殿、思堂等の建物があり、墓前に大小二つの石碑がある。小碑は篆書体で「宣聖墓」と刻まれ、孔子直系51代子孫孔元措が金代に建てられたもので、大碑は同じく孔子直系59代子孫孔彦縉の建てたもので、篆書体で「大成至聖文宣王墓」と刻まれ、明代英宗帝正統8年(1443)、黄養正の書である。墓前の階段は、最初は漢代に造られたものがあるが、唐代に泰山から切り出された「封禪石」で作り直され、清の乾隆帝によってさらに増築された。階段の前置かれた高炉は後世の石工が丹精を込めて造られたものである。なお、孔子の墓の東には、息子孔鯉の墓、南には孫の孔伋の墓がある。

10. 大成殿 曲阜孔廟内にある孔子を奉祀する正殿名で、『孟子・万章句下』の「孔子之謂集大成也」から出典している。曲阜孔廟の大成殿は元名「文宣王殿」であったが、宋代の崇寧三年(1104)、徽宗帝が「大成殿」へと改名の詔書を下し、直筆による瘦金体の「大成殿」という扁額を賜った。そして、清代の雍正帝も孔廟再建の詔書を下し、自ら扁額を書かれ、大きさ1メートル前後ある文字からなるこの扁額は正殿最前列の上方に掲げられている。本殿は元々杏壇の所にあつたが、明代の成化年の改築の際、現在の場所に移転された。明代と清代には、二度も火災に遭い、清代の雍正年間再建の際、「晶瑩黄瓦、準制度與宸居」と特許された。つまり、特別に皇帝の宮殿の規格で再建されることが許可された。孔廟の本殿で、中国三大古代建築の一つと言われている。東西の幅54メートル、南北の奥行き34メートル、高さ32メートルで、正面に九間、縦一列に三間という構成になっている。黄色い瓦で覆われ、柱の上端に正方形の木が取り付けられ、内外二重からなる屋根は異なった構造となっている。殿前に雲と海水の間を飛来する二盤龍のレリーフの彫り込まれている大石柱10本列べられている。正殿の四周にさらに雲龍彫刻の施される18本の石柱が立てられている。正殿の柱、梁、棟、天井等のすべて金箔で盤龍の絵が張り巡

らされている。正殿中央の神龕には、孔子の衣冠正座像があり、両側には「四配」(顔回、曾参、孔伋、孟軻)、「十二哲」(閔損、冉耕、端木賜、仲田、卜商、有若、冉雍、宰予、冉求、言偃、顓孫師、朱熹)が列べられている。殿内には「大成楽」という楽器やその他の祭器が陳列され、殿内外にはずらりと各時代の皇帝が献上された御製扁額が掲げられている。

11. 古泮池 曲阜城内南東方向、孔廟の東にあり、孔子とその門人たちが講義の合間に休憩し遊びする場所、南池とも呼ばれる。さらに南の方には古泮宮もあり、俗には釣魚池とも言う。魯の僖公の古泮宮の跡地である。明代61代の衍聖公である孔弘泰が此処に別荘を建て、清代の乾隆帝はまた此処に行宮を置いた。敷地面積は数ヘクタールで、人工で掘られた四方形の池の周りに垂れ柳、池には蓮の花が植えられている。

12. 舞雩台 曲阜の南方500メートルの所にある台地である。孔子とその門人たちが講義の合間に休憩し遊びする場所の一つである。『論語・先進』には門人たちが孔子に志を聞かれた時、子路、冉有、公西華が発表したあとに、曾皙が「莫春者、春既服成、冠者五六人、童子六七人、浴乎沂、風乎舞雩、咏而归」(暮春には春服既に成り、冠者五・六人、童子六・七人、沂に浴し、舞雩に風して、咏じて帰らん)と続けていた。孔子彼の抱負深く感嘆して「我也賛成だ」と言った。劉宝楠は『論語正義』で「雩壇とは、雩をする(雨乞い)時に設けられる壇である。楽舞がありて、故に舞雩と言う」と解釈している。つまり、雨乞い祭りに舞楽を披露するので「舞雩」と呼んだのである。現在でも、台地があり、鬱蒼と木々が茂っている。明代嘉靖45年(1566)、陳又信の立てた「舞雩壇」と刻まれた石碑がある。近年までは、正面に「聖賢樂趣」という4文字、背面には「孔子遊舞雩、樊遲從而問学」と刻まれていた石碑があった。

13. 梁公林 曲阜城東15キロぐらい離れた所にあり、孔子の父、母及び兄弟の墓地である。『史記・孔子世家』では、丘が生まれて叔梁紇が死し、防山に葬られる。防山は魯の東にあり、故に孔子は其父の墓処と疑った。母はそれを諱した。」梁公林は尼山の北西、南に防山と向かい、北に泗水が流れる。宋代と明代に、孔子の父 叔梁紇は「斉国公」や「啓聖王」と追封された。明代の永楽年間、清代の康熙、乾隆年間、連続して修繕工事が行われ、林内に墓門、石獸、亭殿があり、殿の後方には孔子父母の墓がある。墓の前に「聖考聖国公墓」碑、孔子の兄 孟皮の墓の前に「聖兄伯尼墓」碑が立てられている。「啓聖王」碑は林門の東側に立てられている。

14. 尼 山 曲阜城南東25キロ離れているところにあり、尼邱(丘)山とも呼ばれる。孔子生誕の地である。孔子の名は孔丘であるから、その諱を避けるため、丘を捨てて尼山と呼ぶ。五峰連なっているため、五老峰とも称される。『史記・孔子世家』の記載によると、「孔子は魯の昌平郷、諏訪邑に生まれる。叔梁紇と顔氏女が野合して孔子が生まれ、尼丘に祈して孔子を得る。魯

襄公22年而孔子を生む。」古、尼山は昌平郷に属していた。後周顯徳年間、尼山に尼山孔廟を建てたことがある。元代に廟北に尼山書院も建てられた。尼山の麓に夫子洞があり、廟の前に智源溪、文徳林、中和壑等がある。

15. 夫子洞 「坤靈洞」とも呼ばれ、孔子の誕生した洞穴だと言われている。尼山の東側の崖下にある。孔子の母親である顔征が尼山に祈りをして孔子を身籠もった。家に帰る途中に、ここまで来て、産気づいたので、洞穴に入り、孔子を産んだと言われている。洞穴には象徴的に石床、石枕等があった。元代には洞中に孔子像が安置されていた。洞の前方に「夫子洞」と李予昂の書いた石碑が立てられている。尼山あたりには孔子の生誕にまつわる伝説がたくさんある。

16. 孔子手植え檜 曲阜孔廟大成門後ろの東側にある檜の木である。近くに明代万歴28年(1600)、楊光訓の書いた「先師手植え檜」という碑が立てられている。檜は四方の石欄で囲まれ、枝振りは傘や冠に似、幹は銅干のようで、孔子が自ら手植えられたと言われている。しかし、孔子の植えた木は、西晋懷帝永嘉3年(309)に既に枯れて死んだ。孔子の聖蹟を追慕するため、後世の人たちは元代の至元31年(1294)、及び清代の雍正2年(1724)に、それぞれ孔廟の東庭から移植してきたのである。多くの人々は、孔子手植え檜の栄枯を以て王朝の盛衰を占っていた。

17. 春秋書院 曲阜城南8キロぐらい離れたところの息諷村の北にあり、孔子が『春秋』を編纂した所であると言われている。晩年、列国を周遊して帰国する孔子は魯城に入る前にここ諷で小休止したと言うことで、後世はそこを息諷と名付けた。魯の都に近く、魯国の歴史資料を調べるのに便利であるということで、孔子がそこを『春秋』編纂の地として選んだのである。古には春秋書院があり、書院には「孔子作春秋処」という石碑もあった。

18. 洙泗書院 曲阜城北1キロ位離れた所にあり、孔子が晩年、魯の国に戻り、『詩経』、『春秋』を編纂し、礼楽を定めて、弟子たちに学問を授けた場所であると言われている。『曲阜古跡考』には、「旧名は先師講堂で、孔林の北東にあり」と記載されている。古代の曲阜には、洙泗、春秋、石門、尼山の四大書院があり、洙泗書院はその首である。洙水が北を、泗水が南を流れているから、この名が付けられた。後漢の光武帝以降、次第に廢れていった。元代に跡地に書院が建てられ、明代の洪武6年(1374)に洙泗書院が復活され、文人や学者たちの修行する場として栄えていた。広さ約2ヘクタールある現在のものは清代の改築である。

19. 孔子観川処 曲阜尼山の孔廟内の南東角に観川亭という東屋がある。それはかつて孔子が滔々と流れている川を観じて感嘆したところであると言われている。『論語・子罕』には「子在川上曰：“逝者如其夫、不舍昼夜”。」がある。後世はそれに基づいて孔子の観川処を決めた。観川処は数カ所もあるが、ここが一番有力である。亭に立っては山下に5本の川が合流して大河となって流れていくのが一望できる。

20. 孔子像 孔子が逝去後、その旧居に置かれた「寿堂」には像がなかった。最初の孔子像は前漢末年に書かれたと言われている。『後漢書・蔡邕傳』には、靈帝光和6年(183)「孔子及びその七十二弟子像を書く」と記録されている。南北朝時代の梁元帝(蕭繹)はかつて自ら孔子像を書いたと伝えられている。『水経注』にも、孔子の古里には孔子像がたくさんあると書いてある。唐代になると、孔子は王として尊ばれるようになり、像も増えてきた。以来、歴代皇帝は孔子像作成の勅命を度々出された。歴代の孔子像は帝王像を模倣して作成されるのが普通である。曲阜孔廟大成殿の孔子像はその典型である。正冠を被って、章服を着用、凜として独尊である。しかし、孔廟聖跡殿には『孔子為司寇像』や『孔子行教像』、『孔行顔随像』(孔行顔随小影)、『孔子小像』(大哉孔子賛像)、『孔子燕居像』(孔子凭几坐像)等があり、異なった孔子の体格や風貌が表され、像の風格も全然違う。その他には絵画、印刷、石刻、彫刻の孔子像は数え切れないほどある。孔子の「温にして厲し、威ありて猛からず、恭しくして安し」という精神を表そうとするものが多いが、政治的配慮から孔子像を再現するものもある。

21. 孔子夫婦木像 曲阜の孔府に安置されているもので、孔子逝去後、子貢が孔子の墓のそばに庵を構えて墓守をしているうちに、楷木で彫り刻んだものであると言われている。高さそれぞれ0.3メートル、幅0.05メートルぐらいで、容姿が自然で慈顔、肅々と正座している。北宋末年、金人の乱を避けて、孔子48代子孫 孔端友がその木像を携帯して浙江衢州に移住して、衢州の孔廟大成殿の思魯閣に奉安した。さらに、明代後期、孔端友の孫が、戦乱を逃れて南下する際にも、それを奉じていた。清代になってやっと、元の所に奉還された。彫刻の特徴等から、それは宋代の作品であると推測できる。

22. 大成至聖文宣王像 曲阜孔廟の大成殿中央の神龕には安置されている孔子の衣冠像である。高さ3.3メートルで、正面正座、両眼水平視、両手に鎮圭を持ち、帝制に則り帝王の冠と、12章服を着用。像の前方に「至聖先師孔子」書かれた位牌が置かれている。元の像は清代の雍正8(1730)年に創られたものであるが、「文化大革命」(1966-1976年)中に壊された。現在のものは1984年に、複製されたものである。

23. 聖跡図 曲阜孔廟中路後部聖跡殿にあるもので、孔子の生涯事跡が描かれている。明代の神宗万歴20年(1592)、当時の巡按御史である何出光が聖跡殿の建築工事を主宰し、孔子関係の図画を広く集めて、画家の章草に絵の補充と石に彫刻することを命じた。全部で120枚あり、高さ約38センチ、幅60センチ、聖跡殿内の壁に詰め込んだ。その内容は、孔母の尼山に祈禱して孔子誕生から、その死後、漢劉封が魯で行われた孔子を記念する大牢祭まで、孔子生涯の主要な活動である。この石絵のほかに、「聖跡図」と呼ばれるものは、この石絵の他にも色々ある。例えば、孔府に所蔵してある明代嘉靖年間のカラー絵巻もの「聖跡図」や清代の木版「聖跡図」等も有名である。

未完つづき

注

- ① 森嶋通夫 『続イギリスと日本』 岩波新書 1978年 p.187
- ② レジ・リトル、ウォーレン・リード『儒教ルネッサンス—アジア経済発展の源泉』
池田俊一訳 サイマル出版会 1989年 P.81-86

参考文献

- 桑原 武夫 『論語』 筑摩書房 1974年
金 谷 治 『論語』 岩波クラシックス 1983年
津田左右吉 『論語と孔子の思想』 「津田左右吉全集」14 岩波書店 1964年
浅野 裕一 『孔子神話—宗教としての儒教の形成』 岩波書店 1997年
江 連 隆 『論語と孔子の事典』 大修館書店 1997年
ARNOLD TOYNBEE 『HALF THE WORLD』 THAMS AND HUDSON IN LONDON 1989年
マックス・ウェーバー著 王容芬訳 『儒教と道教』 中国 商務印書館 1995年

なお、本文中の『論語』の日本語訳の引用は、煩雑を避けるため、逐一注釈を省略するが、上記の金谷治『論語』によるものである。